
終わりの福音

旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりの福音

【Nコード】

N1271T

【作者名】

旅人

【あらすじ】

男は見知らぬところに立っていた。

見たことがある、同時にそうではないと感じる空間。

目の前には図書館がある。

そしてそこには空間を埋め尽くす程の膨大な蔵書。

途方に暮れる男の前に、得体の知れない雰囲気を纏う少女が現れる。

青と赤が競うように空を染めている。

夕焼けの中。その場所はどこにでもあるような都会の風景で、少し見上げれば四方八方を大小様々な建物が視界に入ってくる、そんな場所だ。しかし、どこか違和感のある風景。

一人の男が立っていた。

男の立つ周囲は石畳できていて。まるで並木道かの如く左右に木々が並び、石畳を道とすべく正面の建物へ整然と並んでいた。

男の目に力はなく、微かな動きも見当たらない。呼吸すらしていないのではないかとすら思えるほど。例えるなら人形のように。

違和感。

空間には違和感があった。

微動だにしない男然り。そして同じように動きの無い、この街然り。悠久の時を経てもなお空模様すら変わらないこの空間で、どれだけの時間が経っただろうかと、それすら計る術はないが、その中で一つの動きが生まれた。

男は気がつくとその所に立っていた。

石畳の敷かれた木々に囲まれる場所で、視線の先には一つの大きな建物が見える。まるで男を建物へと導こうとするように。

男はしばらくの間所在無さげにしていると、ゆっくりと、しかし確かな足取りで正面の建物へと進み始めた。

男の視線はしっかりと正面を見据えている。

男にとって、その建物は見覚えのあるものではなかった。しかし、それは見たような気のしてくる、そんな風貌の建物。何かしらの役割を持った建物のように思える。入り口は規模の大きい建物に似つかわしくない木製の手押し扉。

男は入り口に立つと、ドアの傍に看板のようなものがあることに気がつく。木でできた、長方形の板だ。そこには文字が書かれていて、男にはその文字を判別することができなかった。

日本語なのか、英語なのか、はたまた他の国の言語なのか。もしかしたらその実、居眠りして書いたミミズが這ったような字なのか。それが『どういった文字なのか』理解できない。しかし、そこに書いてある文字の意味は理解できる。

『 図書館 』

図書館の前に何か文字が書いてあるが、そこだけどうしても意味を理解できない。しかし、後半の意味さえわかればこの建物の用途は見える。

だが、自分は何故この建物に向かうのか。何故入ろうとしているのか。男にはそれはわからない。

そう、考えてみればわからないことだらけだ。この場所は何処だ。

何故誰もいない。何故ここにいる。自分は何がしたい。自分は・・・。
考えが頭を巡るが、それを止める様に体が自然と動いた。背中を押されるように、男は建物の中へと歩を進める。

建物に入り小さな通路を抜ける。その間周囲にめぼしいものは無く、ただ通路としての通路がそこにある。男はそこを抜け、扉をくぐる。とエントランスとも言えるだろう広間にたどり着いた。そこには上下左右、ただ本棚だけで縦横無尽に埋めつくされた空間が広がって

いた。

この世のものとは思えない、ただ本だけで構成されている空間。この内部構造は、例えるなら『塔』の内側だ。左右の壁は緩やかに曲線を描いている。どこかに階段でもあるのだろう、階層毎の高さは相当あるが、二階、三階と、何層まであるのか果てが無く上へと伸びている。

「誰か」

いないか、と言い切る前に気がつく。ここは思ったより音の反響が薄い。加えてこの広さ。ならば仮に誰かいても声で探れるとは思えない。

男は正面へと歩みを進める。右を見ても本、左を見ても本。どれもいわゆる『書籍』に分類されるだろう大きさの本ばかりだ。男は足を止めて一冊の本を手取る。

背表紙には何も書かれていない。紺色で統一され、これと言った装飾もない表紙。もちろん題名すら書いていない。本を開いてみる。

大体三百ページほどあるだろう本の中身は全て白紙だった。

一冊、一冊と本を手にする。しかしどれも白紙だ。男は思う。まさかこの本の森全て白紙なのかと。手にしていた本を棚に戻す。

「

声が、通路のずっと奥、薄暗く続く本棚の谷間から聞こえた気がした。だが音が響くとは思えないこの空間だ。空耳と思うのが普通なのだが、

ここは全てが普通じゃない。

それは男自身も例外ではない。だが、自分が感じたものを、感じたままに行動するだけ。男はさらに奥へと進んでいく。

相変わらず本棚ばかりが陳列する空間。だがそれも終わりが見えた。本棚の森が途切れ、小さく開けた空間が姿を現す。その中心、男の

正面には小さなカウンターがあった。

内部構造、本棚の配置と違わぬ円状で、木製のカウンター。その上には小さなランプだけが所在無さげに置いてあった。カウンターの内側にある椅子は、誰かが席を外しているのだろう少し引いた位置にある。

カウンターの外側にも同じ木製の椅子があり、これは使われた様子も無くそこに収まっていた。カウンターと言うより内側を穿った円卓だ。

「お久しぶり」

男の背後から声がした。この位置に立って足音らしい音は聞こえなかった。

反射的に振り向く。声の主は少女だった。男は咄嗟に『少女』と認識したが、もしかしたら青年女性かもしれない。そんな曖昧に感じる人物だ。

その出で立ちはまるで照る照る坊主かと思うような、全員を覆う灰色の服。片手に数冊の本を抱え、無表情でそこに存在した。整った顔立ちで髪は肩まで伸びている。一般的な身長 of 男から見ると若干見下ろす程度の背丈だ。この空間では異分子であろう男を見てもひるんだ素振りもなく、悠然と立っている。

「俺は、あんたを知らない」

一言。何が面白かったのだろう、少女はクスリと微笑んだ。男の横を通り、円卓に抱えた本を置く。円卓の一部分を少女が持ち上げ内側へと移動した。少女はどこから出したのか、マツチを擦ってランプに火を灯した。辺りを仄かな光が照らす。

「どうしたの？座らないの？」

少女はそう言うと言った。男を意にも介さない様子だ。男は居心地悪そうに、促された通り椅子に座る。少女と男が対面する図式だ。

「ここは何だ？」

「おかしいことを言うのね。見て分からないかしら？図書館、書庫、

保管庫、なんでもいいわ。好きな呼び名でどうぞ」

言つて少女は積まれた本の中から一冊を抜き、男に差し出した。少女は先ほどのような微笑をしている。訝しげに本を受け取る。

それは先ほど手にした本と違い、白色で覆われて表題も印字してある。建物の表札と同じで何語かは分からないが意味は理解できる。

『無意味』

男は本の中ほどをめくる。

『正直言つて、あの時行動していればこんな思いはしなくても済んだのだ。まだ大丈夫、まだ大丈夫、と根拠の無い思いを頑なに信じ込んだ。それに気が付いたのはもう手遅れになつた頃で』

男は本を閉じた。読んだのはほんの一節で、それは文章単体ではまるで面白みの欠けたものだったが、奇妙な感覚のするものを得た。頭の中に登場人物のイメージが鮮明に浮かぶのだ。

男は少女に視線を向ける。同じく白色の本を広げている。タイトルは『あの日』。手元にはいつの間にかティーカップが置かれている。急にいい香りが立ち込めた。

「おい、なんだこれは」

少女の視線が下から上へと移る。

「あなたも飲む？」

「そんなことを言っているんじゃない。この本は何だと言っているんだ」

手元の本を置き、男の顔を覗き込んだ。男が一瞬怯む。

「そうね。そうだった。あなたは読みたくて来たのではなかった。何があなたをここへ誘つたのかしらね」

どこからともなくティーポットを出し、紅茶を淹れ始める。

「彼はお気に召さなかった？」

「『彼』？」

「そう、その手元にある彼」

男の手にある本を指差す。

「この根暗っぽい主人公のことか？ 数行しか読んでないからわからないけど、何か変な感じだ」

「根暗なんて酷いことを言うのね。あなただって十分変なのに」

「あなたの口調だって十分変だ」

そう？と気にする素振りも無く、ティーカップを差し出される。

口にするのは気が引けたが、男は受け取る。続いて少女は言う。手元の本を広げて、

「私にはみんな興味深いけれど。例えば、この人はずっと過去の栄光に縋るあまり今が見えていない。そのせいで失敗を繰り返して、決して良いとは言えない結末を迎えるのだけれど、でもその要素が彼の物語に多様な起伏を生んでる。あなたが読んだ彼は物事が自分の理想通りに行かず、そんな人生は無意味であると信じきって終いに自分の手で物語に幕を降ろすことになるけど、彼が気付いていないだけで幸福はそこそこにあっただわ」

言い終わるとカップを口に運んだ。音も立てずに再び元の位置へと置く。

「饒舌だな。だけど聞いているのは論評じゃない。もっと単純ことだ。ここにある本は」

「わからない？」

男の眼前、数センチの距離まで少女が身を乗り出す。微かに動けば触れ合える距離だ。

「わかるでしょ？」

少女の大きな瞳に自分が写っている。底の見えない瞳が男を怯ませる。

「・・・何が」

溜息一つ、少女は男から離れて元の位置につく。

「知っていたけど、鈍い。それとも理解が怖いのかしら？」

「何を、言ってる」

少女ははつきりと、楽しそうに微笑んだ。

「ふむ。たまには人に説明するのも、面白いか」

「さつきから、一人で勝手に納得するな」

少女は椅子から立ち、円卓を出る。髪を靡かせながら、
「教えてあげる」

ゆっくりと本棚の並びへと向かっていった。慌てて男がそれに続く。

しばらくの間、男は少女の背後に付き従った。本棚を通り過ぎる度に収められている本の色が赤、青、黄といった具合に変化していく。規則性は無いようだ。少女が立ち止まる。

「わかるうとしないあなたをからかうのは面白いけれど、些か飽きたかな」

「ああそうかい」

つれないのね、と少女が言うと、最初の時と同じ無表情に変わった。

「さて、質問を受けましょう。何が聞きたいの？」

そう言うと、本棚の傍にあつた梯子を持ってきて段に腰掛けた。

「この本は誰が書いた？この建物はなんだ？」

「本当にわからないの。どうしてここに來れたのかしら」

不思議そうな素振りを見せるが、まあいいわ、と一拍置いて無造作に本棚から本を引き抜いた。表題は『金』とある。

「一言で言うと、ここにある本は全生命の生きた証」

「なんだって？」

「命あるもの的一生は、まるで一つの作品の様。著者の知性の有る無しは関係なく物語は成り立ち、そして一つとして同じ内容のものはない」

言つて少女は本を開いた。ゆっくりとページをめくっていく。

「『人生は物語のようなものだ』。そして『人生は一冊の書物に似ている』」

視線を本から男へと戻した。言葉を続ける。

「ローマの哲学者セネカと、ドイツの作家ジャン・パウルの言葉。つまり、ここはそういうことよ」

小気味いい音を立て本を閉じる。男は何も言わない。

「この場所には一生を終えた全生命の物語が置かれている。でも読めるのは同じ種族の物語だけ。さっきあなたに渡した彼は三十年ほど前に生きていた。私が読んでいた彼は十年前だったかしら。この彼は数年前まで」

「もういい、わかった」

男が彼女の声を遮る。

「あんたが言ったことはわかった。けれどそれをどうやって信じると?」

「さっき読んだじゃない。それじゃ分からない?」

「分からない」

少女は微笑んだ。

「不思議なことを言うのね。逆に聞くけれど、あなたはどういう基準でこの場所が信じられないの?」

「そんなの決まってる、自分の」

「自分の知識?自分が誰なのかもわからないというのに?」

「一瞬、言っていることの意味が理解できない。『自分が誰なのかわからない』?」

「思い返してみなさい。何故あなたはあの場所に立っていたの?何故この建物に?そもそも、生命の気配すら感じないこの世界を何故疑わなかったの?」

言われた言葉を反芻してみる。しかしそこから生まれる答えは、
「・・・わからない」

「そうだ、わからない。男は思う。何故今まで分からなかったのか。分からない事が分からないとでもいうのだろうか。」

「あなたが何故この場所に来られたかは私にも分からない。でも全ての過程には意味があり、それより導かれた結果にも当然意味があ

る。意味の無い事は無い。あなたが自分も持たずにここへ来た事も、ここにいる事も、きつと意味はあるのでしょね

そこで男が始めて笑った。

「何でも知ってるようで、わからないこともあるんだな」

「もちろん。私は神様じゃないもの」

「じゃあ、お前は何者だ？『自分』を持つてみたいだが」

そうね、と少女は言い、一瞬考える素振りをする。その後座っていた梯子から腰を上げた。

「私は何者でもない。私は、私」

「答えになつてないな。何でも知ってる素振りでも何者でもないなんて。まあいいさ。何者でもないなら、なんて呼べばいいんだ」

一瞬、ほんの一瞬だが、少女の顔に寂しさの影が差した。もしかしたら気のせいかもしれない。少なくとも、男はそう感じた。

「名前は記号。その名を呼ぶ相手が出て、初めて意味がある相対的なものよ。この場所に居続ける私にとって、意味はないわ。あなたと私。私とあなた。それでいいじゃない」

少女に連れられて来た通路を再び戻る。しかし、行きのような重苦しい空気はなく、男にとっては解決した疑問の重さだけ、軽く感じた。違う点は他にもある。二人の手には数冊の本が抱えられている。

「疑問も解決した事だし、せつかく来たのだから彼らを読んであげて。本は誰かに読んでもらう為にあるの」

そう言つて少女は読める範囲の本棚を男に教えた。その時の少女は一時の老練さは無く、見たまま通りの少女の姿だった。

少女の背を追いながら、男は問う。

「なんで同じ種族の本しか読めないんだ？読んでもらう為にあるんだろう。文字が読めなくても意味が理解できる仕様なんだし、読めてもいいんじゃないのか」

少女は顔だけ振り返った。片目だけを男に向ける。

「認識が違うから。人が蝶の認識を理解できると思う？見る世界も物事の表現も違うのだから。同種族でも理解し合えないくらいなのに」

確かにそうだが、そのための意味の理解という機能ではないのか、と男は思う。

「例えるなら訳本ね。違う言語で書かれた物語を読み手の母国語に訳すと物語の表現に歪みが生まれるでしょ？文字に関しては、言語体系が違ってても正確に物語を伝えるため。伝える意味や表現に少しでも差異があるなら、もはや伝える意味は無い。ここはそういう所」
そういうものか、と男が言う。独り言の様に少女は言葉を紡ぐ。

「彼らの著者は彼ら自身。生きながら自分自身に物語を刻んでいくの。物語が終わったらこの場所に収められる。生命は二度失われるの。一度は物語を終えた時。そして二度目は世界から忘れられた時。この場所は、そんな彼らを忘れないためにある」

二人は並んで歩いていく。男から見て少女の身長は低い、この時だけは、とても小さく頼りないものに感じたのだった。

円卓の戻ると、二人は内側と外側、元の位置についた。いつの間にか円卓に置いてあったはずの紅茶は消えていて、少女が改めて淹れなおした。

「読みたくないのならそれでもいいわ。本を読む事を強要するほど無粋でもないし。あなたにとってこの場所は夢みたいなもの。意味が無いと言われればそれまで。その気ならすぐ戻るけど？」

「・・・まだ怪しいとこだらけだが、一冊くらい読むよ。せっかく来たんだし、な」
「そう」

少女は微笑み、紅茶を男に差し出すと、手元の本に視線を落とし、男も積まれた本の山から一冊を取り出し、表紙をめくる。傍に置いてあるカップを口に運ぶ。不思議な味と香りがした。

どれくらいの時が流れただろう。時計も無ければ窓もない空間。観測者がいてもここに時間という概念は意味を成さないのだろう。少女と男は、ただ本を読み続ける。

一冊読んだら去ろうか程度に男は考えていたが、今読んでいる『彼』で十冊目になる。現実の本とは違い、文字を追うのではなく意味が目を通して流れてくる仕組みだ、おそらく現実の本を十冊を読むに要する時間の半分も行っていないだろう。

手元の彼を読み終わったのだろうか、少女が顔を上げる。

「どう？面白い？」

男が顔を上げる。

「そうだな。面白いけど、それ以上に不思議な感じだよ。こんな読書経験はしたことないし。それに」

それに？と少女は反復する。

「少しだけでも、この状況に慣れ始めてる自分が怖いよ。おっと、自分が誰かわからなかったっけ」

男は異常とも言えるこの状況を楽しんでいるようにも思えた。いや、実際楽しんでいるのだろう。男はこの世界から去る時にこの記憶を保持できるとは思っていない。少女が言った様に、ここにいる事に意味があると思いたいだけかもしれない。

「ありがとう」

「急になんだ、気味が悪いな」

「私が言うのも変だけれど。あなたに読んでもらって彼らも喜んでるわ」

「わかるのか？そいつらの気持ち」

「いいえ。でもこれだけはわかる」

彼女は手元の本を閉じ、表紙を愛おしそうに撫でる。

「彼らが生きたから物語がある。そしてそれを読んだあなたは彼らの生きた証。だから、ありがとう」

男は照れ隠しのように頭をかいた。読み終わったのだろう、彼も

本を閉じる。

「思いのほか読んだな。このままずっとここにいても悪くないけど」

そう言っただけ後ろを振り向いた。はるか遠く、本棚でできた並木道の先にある扉。左右の戸の上に火が灯っている。

「そろそろ、行くよ」

「それがいい。始まりがあるから終わりがあるんだもの」

そう言うと、少女は手元のランプを消して円卓の外側へと出た。

「送るわ」

「そうか」

今度は狭い通路を二人並んで歩く。哀愁のようなものは感じられない。別れを惜しむほど理解し合えた訳ではない。だがこの時間を無意味に感じるほど理解し合えなかった訳でもない。

二人は並んで歩く。扉へと至る間に言葉は無かった。

「まあ、なんだかんだ言っただけ楽しかったよ。本も面白かった」

「そう。良かった。私もあなたで遊べて、そうね、楽しかった」

「やっぱり遊んでやがったか」

初めて一緒に微笑んだ。男は扉に手をかける。

「じゃあ・・・と、その前に。やっぱりあなたの名前、教えてくれないよ」

少女は虚を突かれたような表情を見せる。

「言ったでしょ？私は私よ。第一、ここに居続ける私に名前は無意味なの」

男は困ったようにうーんと唸りながら腕を組む。

「だってよ、名前が無意味なんて寂しいだろ」

「私は寂しくないわ。今までもそうだったし、これからもそうなのだから」

「俺が困る。次来た時なんて呼ばばいいんだよ。それに」

男が少女の頭に手を乗せる。その行動に少女はきょとんとしながら

「無意味なものは、ないんだろ？」

一言。キョトンとした次の瞬間、プツと、少女から笑いがこぼれる。

「そう、そうね。無意味な事は無い。来る方法も知らないのにまた此処に来れると信じてるあなたは、本当に面白い」

男はゆつくりと頭、髪を撫でる。少女は心地よさそうに目を瞑る。

「でも、残念。私には本当に名前が無いの。ごめんなさい」

「いや、謝るのは俺のほうだ」

男は扉を引く。来た時と同じ廊下がそこにあつた。廊下の終わり、建物と外の境界である扉の下から光が見える。

「お詫びついでに、俺があんたに名前をつけてあげようか」

「・・・意外な申し出ね。変な名前はお断りよ？」

「それは保証できないな」

「ふふ。ありがとう。でも遠慮しておくわ。今は、まだこのままで」

「そうか。残念」

男は扉をくぐり、少女の傍を離れていく。最後の扉に手をかけ、ゆつくりと引く。来た時とは違って外はまばゆい光で包まれていた。しかし不思議と、眩しくはなかった。

「ありがとう。楽しかったわ」

男が振り返る。少女が笑って手を振っていた。男も返すように手をあげる。光の差す方に向きなおし、一步を踏み出す。二歩、三歩。すぐに建物は見えなくなつた。

「名前をつけてくれるって言ったこと、嬉しかったよ」

光に包まれ、歩み続ける男に声が届く。あらゆる方向から響いている。

「嬉しかった。だから」

一拍置いて、

「次。次来る時に、あなたが『自分』を持って来たのなら。その時、私に名前をください」

かわいい事言いやがると男は思う。聞こえているかもわからない

が、笑顔のまま、大声で。
「またな！」

静かな音を立てて扉が閉まる。

薄暗い本の森で、再び少女は一人になった。踵を返して円卓へと向かう。その表情からは『喜』の感情が窺える。

少女は思う。今回の来訪者は何時振りだろうかと。この場所に時間の概念は無い。出入りもほとんど無い。あっても会話などあった例がなかった。

この場所の趣旨は本という形の『彼らの物語』であり、少女ではない。では、何故この場所に彼女は存在するのか。無意味な事は無いならば、彼女の意味とは？

答えは誰も分からず、それは少女だけのものだ。そして少女は何も語らない。

円卓にたどり着く。今まで彼が座っていた椅子を正し、内側の椅子に座る。ランプに火を灯し、紅茶を淹れ、新たな本を開いた。少女は一人、言葉を紡ぐ。

「終わりがあるから始まりがある。逆もまた然り。始まり、終わる。そしてまた始まっていく。こんなに楽しいことがあるかしら」

彼女は思う。此度の来訪者を。彼にとってこのエピソードは起承転結のどこに位置するのだろうか。それとも番外編？それは彼にしかわからないことだ。

少女はページをめくる。

「ここでまた一つ、物語が終わる。でもここで終わらない。この終わりが次の終わりの始まりになる。そう、全ての事象に完全な終わりなどない。だがそれでも、いつか終わる時がやって来る」

カップを口に運ぶ。

「全ては道の途中。まだ終わらない。そう、あなたの物語も」

閉幕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1271t/>

終わりの福音

2011年5月8日21時41分発行